

I 分野 第3-A分科会

人権・同和学習A

司会者 山本 直美 谷口 浩之

記録者 中村 小百合 細川 秀樹

報告者Ⅰ 山本 和正（但馬）

（見つめ合い、語り合い、つながり合う学級づくり—あったか西小「瞳輝く海の子 太陽の子」をめざして）

報告者Ⅱ 坂下 大樹（阪神）

（差別のない社会をめざして—部落差別から学ぶ—）

報告者Ⅲ 三宅 正剛（阪神）

（本校における人権教育の取り組み）

■研究討議の概要

<報告Ⅰについて>

司会 温かい取り組みをたくさん紹介いただいた。直接、同和学習に関わらないが、特支を中心とした温かい雰囲気を感じる。

西播磨 聴覚障害をもつではなく、障害があるですね。障がいの「がい」に、ひらがなと漢字の表記があるが意味はあるか。

報告者Ⅰ 不適格な言葉は訂正をさせていただく。聴覚障害は漢字を使われる言葉が多い。障がいは最近、ひらがなが使われる。

西播磨 竜野市の小学校の方でも意識的に「がい」をひらがなに直している。統一した方がよいのではないかと思います。

但馬 浜坂西小にも訪問したことがある。小規模校でアットホームだからこそその課題、中学校では人数が増えるが対策はあるか。Aさんは同じ仲間生徒であるが、Aさん自身の思い、願いをどんなふうにするか、かなえているか。

報告者Ⅰ 但馬は同じような課題がある。クラス替えがないのは良い面。課題は家庭的な面もみな知っているデメリットがある。児童1人に対する職員が多く、全職員で子どもを見られるメリットがある。情報共有が週1回できる。Aさんは通学2年目で、職員もこれ

から研修する。バギーで週半分の登校だが、他の子どもが学べる。教育保証している。

但馬 Aさんは意思表示が難しい。両親、医療機関ともしっかり連携している。

司会 Aさんの学級通信が貼られたり、参加できる集会も考えられたりAさんを大事に思うサイクルができています。

但馬 実践では障害など相手のことをよく考えている。思いが一方通行にならないようにすることが大切。インドネシアとの交流でインドネシアの方はどうとらえているか。外国人労働者の人権に課題もあるがどうか。

報告者Ⅰ 実習生はほとんどがインドネシア人。10数人、今年も来ていただいた。大変ありがたく思っておられる。ダンスを教えてください、お菓子をいただいたりした。

阪神 障害者差別推進法は法律なので漢字。宝塚市では石偏の碍は公文書、報告の文章ではひらがなを使う。ひらがなの方が浸透していくのではないかと。

司会 大事なことを今、学習している。差別の意思がなくても言葉を使ってしまう。

東播磨 A子さんやインドネシアの方、その人と出会ってこそ知ることがある。人権意識を育てられているのではないかと。

阪神 A子さんの親御さんの負担がもしあれば知りたい。

但馬 大きな行事は親御さんが付き添う。通学は親がしている。学校での負担はない。

但馬 運動会練習でも他の子たちからAさんと一緒に参加したい気持ちが出ている。担任としてうれしい。

西播磨 藤田威さんの家族の思いや周りの支援などを学習したか。それが人権教育、部落差別を学ぶことにもつながる。

司会 子どもたちに思いを伝えて、道徳にもつなげていきたい。

<報告Ⅱについて>

阪神 土農工商の授業、学校でのとらえは。

報告者Ⅱ 生徒からこの言葉が出てきた。身分制度は存在していた。

西播磨 心理的差別を解消する手立ては入っているか。北代さんが貧しくされてしまった時代背景を教えてほしい。校区の部落の方に思いを聞いてほしい。

阪神 法律としてもいまだに差別はある。宝塚では同和問題ではなく、部落問題に文字を変えた。差別をした側に焦点を当てる。差別をしない子にしてほしい。間違っている、犯罪だと教えてほしい。

東播磨 土農工商、民であって階級ではない。教科書は変わっているのに、教えてしまっている。部落として誇りに思えることもある。学校での取り組みはどうか。

報告者Ⅱ 当時はどうであったか新しく勉強していきたい。

丹波 人権教育は学び合う関係。資料を一緒に考える、教員は教える気持ちを捨ててもいいのでは。新しい世代を育てていきたい。

阪神 地域の歴史を知ろうという取り組みをしている。江戸時代に何をしていたかが分からない。歴史を消されている。ちゃんと位置付けたい。土農工商はどうでもいい。何が一番大事なのかをちゃんと伝えていく。

阪神 人権尊重は言葉遣いが大事。

司会 みなさん真剣になってくださっているので真剣になれる。見抜くことができないもどかしさがある。この場にいるだけで勉強になる。

阪神 地元4校で人権学習の話をさせていただいている。識字教室で学んだおかげで、「たかが鉛筆、されど鉛筆。」社会に出てからも、この年になっても学んでいる。

報告者Ⅱ 識字教室に教えに行っているが、歴史を教えてくれる。「心のおしゃれはできませんよ。」の言葉が心に残っている。改善案をもとに自分を磨いていきたい。

<報告Ⅲについて>

但馬 職員研修について教えていただきたい。

報告者Ⅲ LGBTs については日高先生に来ていただいたり打ち合わせをしたりしている。

県とも学校の誰かがいれば対応できる体制にしている。

西播磨 こだわりのある子やアスペルガー、ADHD等の子はいないか。

阪神 いる。

西播磨 不登校の研修はないか。

報告者Ⅲ 今年度はしていない。把握していない。

西播磨 統一応募用紙については。

報告者Ⅲ 過去と現在の様式でどういう違いがあるのかを考えてもらっている。

阪神 就職面接で不適切な質問はあがってきているか。トランスのお子さんはどのようにしているか。尼崎ではトランスの診断の中学生全員が不登校になっている。

報告者Ⅲ 1つ目の質問について、今はまだ分からない。過去には少なからずあった。答えにくい雰囲気がある。2つ目の質問については、非常にうまくいっている。小学校から違和感があり、中学校では言いたくても言えなかった。現在はズボンで登校している。文化部でクラブ活動をしている。職員トイレを活用している。今のところは順調である。宿泊、修学旅行は課題であり、学校の方針はまだたてていない。

西播磨 ヘアドネーション、提供するために30cm以上伸ばしている。ヘアドネーションを高校側は受け入れているか。

報告者Ⅲ 地毛が赤い際は申請、地毛では小さいころの写真を見せる親もいる。

司会 中学校では、校則が現状はある。LGBTsの子は髪の毛を伸ばしたい。時代に合わせて変えていかねばならない。大阪では男女で校則を分けている。

西播磨 自分の学校で起きたらどうしようかと思う。世の中の情勢、人権に関わっていく。

阪神 ヘアドネーションの気持ちは大切だが、個人的には校則を守ってほしい。

司会 ひげのことも裁判になったりしている。

■総括と今後の課題

報告Ⅰでは、特別支援学級（肢体不自由）に通うAさんとの関わりや、聴覚障がいがありながら画家として障がい者福祉の先駆者として生きた地域の先人に学ぶ学習、地域に暮らす外国人との触れ合いなどが報告された。重度の障がいのある児童と共に暮らし、相手のことを大切に考え生活することで、障がいの有無にかかわらず、一緒にいることが当たり前であるという意識も育っている。重度の障がいのある児童と共に学ぶために保護者、医療機関との連携も常に行われているということである。連携するとともに、保護者に負担のかからないように配慮することも大切である。また、地域に暮らす外国人との交流では、交流をすることで同じ地域に共に暮らす仲間としての意識が育っていると発表された。

「障がい」という文字の表記では「がい」を平仮名で表記されるようになってきている。差別の意思がなくても、相手を傷つける可能性のある「害」の字を使うことがあり、意識を高く持つことが子どもたちの心を育てることにつながるということを忘れてはならない。

報告Ⅱでは、「差別のない社会をめざして」をテーマに部落差別の問題を中心とした3つの授業の取り組み等について報告された。「差別」と「区別」の違いを考える中で、何が差別なのかを改めて考え、日本国内に根強く残る部落差別について知り、このような差別がどれだけの影響をあたえてきてしまったかを学ぶ取り組みであった。同和問題は知っているけれど過去のことという思いが一部にはある。しかし、人々の意識の中に差別がのこっている。差別事象とともに差別した人の非人間性を学び差別を許さない心を育てることが大切である。同和学习は、知識を得ることではなく共感することが大切である。小学校での学習と連携し、学び続けていく必要がある。子どもたちに差別を見抜き、はねかえす力をつけていきたい。また、歴史学習は変化してきている。指導に当たるものが改めて学習会

を開いて統一の考えを持ちたいと考える。

報告Ⅲでは、未来に対する希望や生きる目標を持ちにくい生徒の心と向き合い生徒理解とコミュニケーションを深めることで、一人一人が大切に扱われていると感じ、自分自身を肯定的にとらえ前向きに生きていく生徒を育てる取り組みが報告された。SNSの利用にともなういじめ問題を事例に挙げ、情報機器の適切な使用についての学習や修学旅行と関連付けてアイヌや沖縄の人々の歴史などに関する人権問題についての学習、就職の採用試験においておこなわれた差別などの問題を学習し人権意識を養うなどの事例が発表された。LGBTs生徒に対して、職員が講師を招き研修を行って対応できる体制を整えていると報告され、どの学校でもこの体制を整えていく必要があると感じた。学校生活に適應できず不登校になっている事例もあると聞く。校則や制服についても考えていく必要がある。また、就職に対する課題もあるのが現状である。世の中の変化に対応し、変わっていくべき部分とゆずれない部分を考えるときである。

小学校、中学校、高等学校とそれぞれの校種からの発表があった。それぞれの学校に応じた特色ある取り組みの中で差別の現実から学び自尊感情や人権意識を高めていく必要を感じた。まだまだ差別が残っている中で教師が人権感覚を磨き、子どもたちが差別をしない、させない環境をつくっていききたい。世の中の動きが変わっていく中で教師もアップデートしていく必要がある。互いに学び合い取り組みを進めていきたい。